様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７７０２３３

研究課題名（和文）中近世の外交遺産の蓄積と流通―入明記と大蔵経を軸として―

研究課題名（英文）Study of accumulation and circulation of a diplomatic legacy in the Medieval Ages--Focusing on Travel diary and Buddhist Sutras

研究代表者
須田　牧子（SUDA, MAKIKO）

東京大学・史料編纂所・助教

研究者番号：６０４３１７９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の具体的な研究活動は3つの柱で構成される。①日明関係史料群の調査と翻刻、②中世日朝関係のなかで輸入されてきた大蔵経の所在調査と関連史料調査、③日朝日明関係に深く関与した大内氏の在京活動の検討。
柱①については第一に、「策彦入明記録及送行書画類」所収の未翻刻史料をはじめとする史料紹介をいくつか公刊した。またそれらの成果をもとに『日明関係史研究入門』を公刊した。第二に、倭寇図巻研究の成果をとりまとめ刊行した。柱②については別科研とも連携し、幾つかの大蔵経の基礎的調査を継続的に行い重要な知見を得た。柱③については貴族の日記の翻刻を通じ時代に関わる基礎史料研究を行った。

研究成果の概要（英文）：This research consists of 3 elements.(1)Study of historical sources which indicate a relation between Japan and Ming dynasty.(2)Study of the Buddhist Sutras introduced from Korea in the Medieval Ages.(3)Study of activity in Kyoto of Ouchis.
About(1),I published some research papers about a travel diary. Next I published “niti-min kankeishi kenkyu nyumon” and the research book about "WAKO-ZUKAN". About(2),I investigated about Buddhist Sutras introduced from Korea in Japan. About(3),I studied the 15th century aristocrat's diary.

研究分野：日本中世史

キーワード：入明記　大蔵経　日明関係　日朝関係　遣明船　策彦周良　大内氏

１．研究開始当初の背景

1980 年以来飛躍的な発展を遂げた中世対外関係史研究は、東アジア海域史という新しい分野を生み出し、活発な研究活動により多くの成果が蓄積され続けている。しかしながらこの状況にあって、中世日明関係史研究、なかでも遣明使についての研究は、長らく低調な状態にあったと言わざるを得ない。その理由の一端は研究の基盤となる史料の集積とその史料学的な検討が手薄であったことにある。遣明船の通史的・基礎的な検討は小葉田淳氏がいまだに随一であり、日明関係史料の根幹をなす入明記類の検討は牧田諦亮氏の業績にいまだに依拠している。これが彼らの研究の偉大さによることは勿論であるが、しかし彼らの研究が世に問われてすでに6、70 年が過ぎ、隣接分野の著しい発展と史料公開状況の格段の向上の見られる今日において、いま一度日明関係の基礎史料の史料学的検討を行ない、周辺史料の検索を進めて、日明関係史史料群の裾野を広げること、それをもとに、各遣明船の動向を子細に追い、東アジアという広がりのなかで日明関係を捉えなおしていくことは、不可欠の課題である。こうした認識は近年広く共有されつつあり、遣明使の残した旅日記（以下、入明記）の代表格である策彦周良の「初渡集」（天文 8 年度遣明船）の記録について、現地踏査を行ないながら精読していく地道な作業が、数年にわたって続けられている（2005-2009 年特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」・2010-2013 年基盤研究（B)「前近代東アジアの外交と異文化接触」)。

研究代表者も以上の認識に基づき、2006－2007 年若手研究スタートアップ・2008－2010 年若手研究 B の研究成果として、最古の入明記である「笑雲入明記」（宝徳度遣明船従僧笑雲瑞訢の記録）の注釈本を公刊した。また日明関係史料の根幹をなす「策彦入明記録及送行書画類三十一種・十四種」の全点マイクロ撮影・デジタル撮影を初めて行ない、これを所属機関の図書室に納めて、実証研究のための学界共通の基盤を整えた。これによって初めて公的機関に史料写真が架蔵され、研究者が閲覧できるようになった。さらにこれら史料については内容の検討とともに、テキストデータ化を進め、試験的に前述の「初渡集」精読会の場にも提供した。膨大な関連史料を自在に引用しうることで、人名や事象についての理解が深まるという意味でかなりの威力を発揮した。さらに「策彦和尚送行書画類三十一種・十四種」に含まれる史料一点一点の写本作成の状況の調査と関連する周辺史料の収集にも着手したが、これが予想以上に膨大であり、かつ散在していたために、悉皆調査を行なってまとめるところまでは到底行きつかず、収集したデータの整理も、整理のための視角を持ち得なかったために不十分なままになっていた。本研究課題は、この現状に鑑み、分析視角を設定したうえで、引き続き日明関係史料研究の充実を図ることを目的として開始した。

２．研究の目的

１で述べた状況を踏まえ、収集したデータ類を、外交遺産の蓄積と流通という視角から整理し、中世対外関係の展開のなかで蓄積された外交遺産が、中近世を通じて、いかに受け継がれ流通していったかを解明し、中世後期対外関係が国内社会にいかなる影響をもたらしたのかを探っていくことを研究の目的とする。具体的には、第一に、現実の対外関係の展開のなかで蓄積された書状類・備忘録・日記等の史料群を外交遺産ととらえ、その外交遺産がいかに引き継がれていったのかを検討することで日明関係に対する中近世期の関心のあり方を見通すとともに、現在日明関係史研究で使われている史料の裾野の拡張を目指す。第二に、外交知識ともいうべき前者に対し、モノとしての外交遺産の代表的なものである大蔵経の所在調査と現物調査を通じ、外交遺産がいかなる経歴をたどって今日まで残されたのかという視点から、中世後期対外関係の国内社会における影響を検討する。

３．研究の方法

具体的な研究活動を３つの柱で構成し、状況に応じて柔軟に進めた。

①日明関係史料群の調査と翻刻：東アジア各所に所在する日明関係史料群の網羅収集をするとともに、可及的速やかに翻刻し、しかるべき媒体で発表する。

②大蔵経の所在調査と関連史料調査：全国各所に所在する大蔵経について、その来歴を検討し、現物調査を行なって、史料的性格を確定する。併せて関連史料の収集を行ない、当該期の社会情勢の中に位置づけうるよう努める。

③大内氏の在京活動の検討：主として京都奈良に残る大内氏関係史料の収集と分析を通じ、東アジア海域において大きな力を持った大内氏が国内においてどのような活動を展開し、それが日明・日朝関係の維持にいかに寄与したかを検討する。

４．研究成果

（１）日明関係史料群の調査と翻刻

本研究の中心をなす日明関係史料研究については大きくわけて三つの成果が生まれた。

①14 世紀後半-16 世紀前半の遣明船研究

入明記と入明記の関連史料の収集の成果として、第一に、従来典拠不明とされ、中途半端に引用されてきた史料の典拠を発見し、解題を付して史料紹介した（雑誌論文②)。天文８年度船の使節団幹部選定に関わる重要な史料が含まれており、貴重である。

第二に「策彦和尚送行書画類」に含まれる史料で、従来脱漏の多い翻刻のみが知られていた史料を、改めて翻刻し、解題を付して公

刊した（雑誌論文④）。本史料については、史料的性格も定まっていなかったが、本研究により、入明記の単なる抄録ではなく、いわば業務報告書として、入明記とは別に作成された史料であることが明らかになり、従来、入明記本体に記述がないことから疑われてきた記述も、妥当な位置づけを得ることになった。これにより遣明船における論点の一つである勘合の問題にも新たな見解を提示することになった。

第三に、旧新井白石旧蔵本のなかの入明関係史料の紹介を試みた（雑誌論文⑯）。天文8年度・16年度の遣明船について新たな知見を加えることができる史料であるとともに、近世における入明記故実の伝来という観点からも貴重な示唆を含む史料である。そのほか「策彦和尚送行書画類」に含まれる未公刊史料である『謙齋雑稿』の荒翻刻を終えたが、当該史料は詩文集であり、研究代表者の専門からして、注解の付与が容易ではなく、予想以上の難航を強いられており、公刊できるレベルにはまだ至っていない。

第四に以上のごとく展開した日明関係史料研究を踏まえ、総論的な文章もいくつか公刊した。そのうち最大の成果は『日明関係史研究入門』（図書②）の刊行である。編者として携わるほか、下記項目を執筆し、本研究の成果を盛り込んだ。「研究史と史料―遣明船を研究するために」（伊藤幸司氏と共著、40/70 頁）、「策彦周良」（単著、176-181 頁）・「遣明使節の旅・総説」（単著、201/209 頁）・「『笑雲入明記―宝徳度の旅日記』」（単著、210/216 頁）・「『初渡集』・『再渡集』―天文八・一六年度の旅日記」（単著、230/240 頁）・「京杭運河」（単著、279/293 頁）。ほかに本研究の成果を報告したものとして論文③⑪⑫、学会報告②③⑤などもある。

②倭寇図巻研究

①で研究対象とした遣明船貿易は 16 世紀半ばになし崩し的に終焉に向かうが、同時期の日明関係における最大の課題は倭寇問題である。本研究に先行する研究課題から進めてきた、この時期の倭寇を描いた作品「倭寇図巻」の研究は、高精細の赤外線撮影による新たな文字の発見、美術史的視点の導入などにより、日明関係史研究の史料の裾野を拡げた成果として注目されてきた。本研究においては、この成果を改めて整理・検討し（論文⑮、学会報告④⑥）、一般向けの図録（図書③）、研究者向けの論文集（図書①）としてまとめ、公刊した。新聞記事でも何度か取り上げられるなど、一般へのインパクトは本研究の中では最も大きかった成果である。

③その他日明関係史料研究

近世における中世外交文書の集積の様相を調べる過程でたまたま出会い、成果として大きく結実したのが、16 世紀末期、豊臣秀吉を明が冊封した際に出された文書の研究である。明朝が秀吉麾下の武将達に官位を授けた任命書（明国兵部箚付）が現在三通伝存しているが、うち一通は研究代表者の所属機関の所蔵であった。これらは従来、史料学的にも政治史的にも十分に位置づけられていなかった史料であるが、この三通の文書を顕微鏡撮影を伴う紙質調査も含めた詳細な原本調査を基礎に比較研究を行ない、学会報告①、雑誌論文①としてまとめを試みた。学会報告後、所属機関所蔵の「明国箚付（前田玄以宛）」は 2017 年 3 月重要文化財指定に向けて答申された。なお 2016 年 3 月には倭寇図巻研究の一環として史料研究を深めた「蒋洲咨文」が同様に答申され、重文指定されている。

（２）大蔵経の所在調査と関連史料調査

概観を雑誌論文㉒で報告し、また対馬宗氏由来の大蔵経について雑誌論文⑳で報告した。同じく対馬宗氏ゆかりの大蔵経・大内氏ゆかりの大蔵経の現物調査を進め、様々な知見を得ているが、諸般の事情により成文化はまだしていない。この研究については途中から別科研との効果的な連携のもとに進めており、以後はそちらの科研において引き続き調査を推進する予定である。

（３）大内氏の在京活動の検討

16 世紀の遣明船を結果的に独占した大内氏研究において、大内氏の在京活動の具体像の検討は重要なテーマであるが、これについて、雑誌論文⑱㉑を公刊し、サーヴェイを試みた。また 15 世紀の貴族の未翻刻日記の翻刻を続け、時代に関わる基礎的史料研究を行った（雑誌論文⑤⑦⑩⑰）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２２件）

①「原本調査から見る豊臣秀吉の冊封と陪臣への授職」、須田牧子、黒嶋敏・屋良健一郎編『琉球史料学の船出』勉誠出版、261/303 頁、査読無、2017 年 5 月。

②「東京大学史料編纂所所蔵謄写本『黒岡帯刀氏所蔵文書』」、岡本真・須田牧子、『九州史学』176 号、26/44 頁、査読有、2017 年 5 月。

③「世界史的視野で中学校歴史教科書の前近代史叙述を検討する」、山田耕太・梅村尚樹・仲田公輔・須田牧子、『歴史学研究』956 号、20/29 頁、査読無、2017 年 4 月。

④「天龍寺妙智院所蔵『入明略記』」、岡本真・須田牧子、『東京大学史料編纂所研究紀要』27 号、118/131 頁、査読無、2017 年 3 月。

⑤「綱光公記―文安六年（宝徳元年）四月～八月記」、遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎、『東京大学史料編纂所研究紀要』27 号、106/117 頁、査読無、2017 年 3 月。

⑥「『「倭寇図巻」「抗倭図巻」をよむ』の刊行」、須田牧子、『画像史料解析センター通信』74 号、18 頁、査読無、2016 年 7 月。

⑦「綱光公記―文安五年記・文安六年正月～三月記・文安五年符案」、遠藤珠紀・須田牧

子・田中奈保・桃崎有一郎、『東京大学史料編纂所研究紀要』26 号、94／107 頁、査読無、2016 年 3 月。
⑧「「倭寇図巻」の図像学」、須田牧子、九州国立博物館編『戦国大名―九州の群雄とアジアの波濤』、55/57 頁、査読無、2015 年 4 月
⑨「特定共同研究倭寇プロジェクト、三年間の成果」、須田牧子『東京大学史料編纂所研究紀要』25 号、108／116 頁、査読有、2015 年 3 月。
⑩「綱光公記―応仁元年暦記・応仁元年四月別記」、遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎『東京大学史料編纂所研究紀要』25 号、82／93 頁、査読無、2015 年 3 月。
⑪「異国の人々が見た日本のジェンダー」、須田牧子、久留島典子・長野ひろ子・長志珠絵編『ジェンダーから見た日本史』大月書店、110／111 頁、査読無、2015 年 1 月。
⑫「杭州へのあこがれ、虚構の詩作」、須田牧子、東京大学史料編纂所編『日本史の森をゆく』中公新書、60／64 頁、査読無、2014 年 12 月。
⑬「『描かれた倭寇―倭寇図巻と抗倭図巻』の刊行」、須田牧子『画像史料解析センター通信』66 号、9 頁、査読無、2014 年 7 月。
⑭「「倭寇図巻」研究の新展開―『描かれた倭寇』発刊に寄せて」、須田牧子、『本郷』112、12/14 頁、査読無、2014 年 7 月。
⑮「倭寇図巻研究の現状と課題」、須田牧子、『東京大学史料編纂所研究紀要』24 号、査読有、121／126 頁、2014 年 3 月。
⑯「宮内庁書陵部所蔵『策彦周良等往来雑記』」、岡本真・須田牧子、『東京大学史料編纂所研究紀要』24 号、査読無、102／114 頁、2014 年 3 月。
⑰「綱光公記―寛正五年暦記（二）・寛正五年一一月一二月別記」、遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎、『東京大学史料編纂所研究紀要』24 号、査読無、78／88 頁、2014 年 3 月。
⑱「時代のキーパーソン・大内義興」、須田牧子『週刊朝日百科日本の歴史 26 乱世を生きた人々』朝日新聞出版、査読無、7 頁、2013 年 12 月。
⑲史料解説「海東諸国総図」「俊仲周鷹書状」「蒋洲咨文」「明国劄付」、須田牧子、東京大学史料編纂所編・発行『東アジアと日本、世界と日本』、査読無、34／36 頁、2013 年 11 月。
⑳「対馬宗氏の大蔵経輸入」、須田牧子、『日本歴史』784 号、査読有、77/87 頁、2013 年 9 月。
㉑「大内氏の在京活動」、須田牧子、鹿毛敏夫編『大内と大友』勉誠出版、査読無、97／113 頁、2013 年 6 月。
㉒「중세 일조관계에서의 대장경（中世日朝関係のなかの大蔵経）」、須田牧子、『朝鮮時代의韓国과日本（朝鮮時代の日本と朝鮮）』景仁文化社、査読無、293／308 頁、2013 年 4 月。

〔学会発表〕（計６件）
①「原本調査から見る豊臣秀吉の冊封と陪臣への授職」、須田牧子、個別報告、共同利用共同研究拠点一般共同研究「東大学史料編纂所所蔵東アジア関係古文書資料の調査・研究」公開研究会「秀吉の「冊封」と箚付」、於東京大学(東京都文京区)2016 年 12 月 14 日。
②「〈「世界史的視野で前近代史叙述を検討する―中学校歴史教科書と学習指導要領の現状をどう見るか―」〉一四世紀半ば-一六世紀半ばの東アジア世界の記述」、須田牧子、個別報告、歴史学研究会ほか主催「シンポジウム 歴史教科書 いままでとこれから ＰＡＲＴ11」、於東京大学（東京都文京区）、2015 年 6 月 28 日。
③「入明記から読み解く 15・16 世紀の日明関係」、須田牧子、招待講演、「異域之眼―日本人的漢文遊記研究」学術検討会、於浙江工商大学東亜研究院（中国･浙江省杭州市）、2015 年 3 月 14 日。
④「「倭寇図巻」研究の新展開」、須田牧子、招待講演、神奈川県高等学校社会科部会歴史分科会春季研究大会、於地球市民かながわプラザ（神奈川県横浜市）、2015 年 3 月 6 日
⑤「遣明使の旅路―入明記から読み解く 15・16 世紀の日明関係」、須田牧子、個別報告、第 14 回ヨーロッパ日本学会大会（14TH Conference of The European Assoiation for Japanese Studies)、於リュブリャナ大学（スロベニア･リュブリャナ市)2014 年 8 月 28 日。
⑥「特定共同研究倭寇プロジェクト、三年間の成果」、共同利用共同研究拠点研究「日本史史料の研究資源化」特定共同研究（海外）「倭寇と倭寇図巻をめぐる研究集会―美術史の視点から２」、須田牧子、個別報告、於東京大学(東京都文京区)､2014 年 1 月 14 日。

〔図書〕（計３件）
①『「倭寇図巻」「抗倭図巻」をよむ』、須田牧子編、勉誠出版、全 528 頁、査読無、2016 年 4 月。
②『日明関係史研究入門―アジアのなかの遣明船』、村井章介・橋本雄・伊藤幸司・須田牧子・関周一編、勉誠出版、全 568 頁、査読無、2015 年 10 月。
③『描かれた倭寇 「倭寇図巻」と「抗倭図巻」』、東京大学史料編纂所編、責任編集須田牧子、吉川弘文館、全 112 頁、2014 年 10 月。

６．研究組織
(1)研究代表者
須田　牧子（SUDA　MAKIKO）
東京大学・史料編纂所・助教
研究者番号：60431798
(2)研究分担者
なし。
(3)連携研究者
なし。
(4)研究協力者
なし。